やっと報告書を仕上げ、部下に「これ、躑躅ヶ崎館の大将のトコまで頼むね」と託そうとしたときである。佐助は、部下の様子が何だかそわそわと落ち着かないことに気付いた。
「どうした？」
「あ、いえ……」
問いかけてみたが、部下は歯切れ悪く佐助の問いをはぐらかし、報告書を持って姿を消してしまう。
（……？）
気にはなったが、佐助に報告がないということは何か深刻なことが起きているわけではあるまい。
（それじゃ、次は旦那のおやつ作りにかかりますかね）
佐助は改めて気を取り直し、腕まくりしながら厨に向かったのだが、その途中、思わぬ人物に出くわす羽目に陥ったのである。
「よう、忍びの兄さん！　元気だったかい？」
「……ッ！　ちょ、何しに来たの、風来坊！　また、うちのそば全部食い尽くしにきたんじゃないだろうね!?」
前田慶次。前田家当主・前田利家の甥っ子だが、戦が嫌いで家を飛び出し、あちこちふらふらしている変わり者だ。以前、この上田に「虎のおっさんに会わせろよ！」などといって殴り込んできたことがあり、その時屋敷中のそばを食い尽くして逃亡したのである。以来、たまにふらりと幸村の元を訪れては手合わせしたり飲み食いして帰って行くが、今度はなんだ？
思わず身構えた佐助だったが、慶次はけらけらと笑って首を横に振る。
「やだなぁ！　珍しく幸村の方から『遊びに来い』って手紙もらったんで、お言葉に甘えてやって来たんじゃないか。……で、幸村は部屋かい？」
「は!?」
さしもの佐助も、これには仰天した。
（ちょっと待てよ!?　確かにさっき旦那、『友を呼んで語ろう』とか云ってたけどさぁ！）
だがそれは、本当につい一時ほど前のことだ。いつの間に主は、そんな手紙を慶次に出したというのだ？
と、そこで佐助は唐突に思い当たった。
（さては旦那、忍びを使ったね？）
道理でさっき、部下の様子が変だったわけだ。おそらく幸村が慶次宛の手紙を「佐助に知られぬよう、急ぎ届けてまいれ」とでも云って、部下の誰かに託したのだろう。
まぁそれに応えて上田までやって来た、慶次の機動の速さも大概だとは思うが……。
佐助はため息をつくと、慶次を見上げて口を開き……かけたところで、
「おーい、こいつはどっから入れりゃいいんだ？」
聞き覚えがある声を聞いて、慌てて振り返った。
視線の先で仁王立ちしていたのは、西海の鬼こと長曾我部元親。しかも、その指し示す先には……、
「ちょっ!?　西海の鬼!?　あんた一体、何持ってきたの！そんなもの、城中に入れちゃダメ！」
ずしーんずしーんととんでもない地響きを立てながら近付いてくるのは、元親自慢のからくり兵器・暁丸だ。一体全体、あんなものを持って奴は何をしに来たんだ？　一応長曾我部と真田とは、同盟を結んでいるはずなのだが……。